

2006年度（第8回）学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」

総 評

高 橋 友 子

今年度の「女性学インスティテュート賞」には、喜ばしいところに、10点もの応募がありました。例年どおり夏休み中に審査委員が査読を行ない、9月22日の審査委員会にて、最優秀賞1点、優秀賞1点が決定しました。優秀賞を受けた論文の内容と講評は、以下のとおりです。

最優秀賞は、淵上愛子さん（2006年3月人間科学部人間科学科卒業）の「小学生向けの学年別学習雑誌にみる女の子と男の子」です。この論文は、小学館が発行している学年別学習雑誌『小学1年生』～『小学6年生』にみられる男女の性差、つまり、女の子向けの読み物、ふろくと男の子向けのそれらの違いと、これらの雑誌のなかで女の子と男の子がどのような存在として捉えられているかを、考察の中心としています。分析の対象は漫画、ふろく、交換ノート、おしゃれと化粧などです。論文としては体裁が不備なところもありますが、読みやすい文章で、論旨もしっかりしていて、受賞に値する十分な内容を備えているというのが、審査委員のほぼ共通する見解でした。

ただし、この論文には、実際の読者である小学生がこれらの雑誌をどのように受けとめているかという視点が欠落していること、論文で展開されているジェンダー分析がステレオタイプ化されたもので、新しい発見を含んでいないこと、また各項目の分析を通して、論文全体としてどのような知見が得られるのかが不明なこと、分析対象としたのが2005年5月号から9月号までの限定された期間であるので、できれば数年にわたる調査研究にすべきであるといった問題点も指摘されたことを付言しておきましょう。

一方、優秀賞は、大角尚子さん（2006年3月人間科学部人間科学科卒業）の「変化する母子関係～娘の結婚をきっかけにして～」です。この論文は、母娘関係を女性学の視点から分析し、結婚と出産という女性の人生における大きな

契機に考察の焦点を絞った点に独自性と立論の良さがあり、役割の変化とともに、娘の心理と母親の心理が変化していく様子がうまく説明されています。記述が精緻で説得力があり、また、先行研究を効果的に用いている点も評価されました。

しかし、倫理上の問題として、分析前にインタビューを受ける人に逐語録を検閲させたか、また分析の手続きの詳細はどうだったのかについての記述がないこと、インタビューを受けた20名が本当に社会の平均像といえるのか、さらに、結婚から出産の直後という時期は女性の人生にとってかなり特殊な時期で、それ以外の時期、特にこの論文の対象とは対称的ともいえる親の介護の時期の母娘の関係はどうか、といった疑問点も審査委員から出されました。

昨年度以降、懸賞論文への応募が増えていることは、女性学インスティテュートのディレクターとして喜ばしく思います。けれども、最近の状況として、応募される論文のテーマがもはや歴史や文学、法学や社会学の古典的なテーマ、たとえば、女性と仕事や女性史などではなくなっていることを残念に思うのは、私だけでしょうか。全体として、取りあげられるテーマの視野が狭いように窺えます。

また、応募される論文には卒業論文がほとんどで、受賞が決定するころには該当者は卒業し就職しておられるため、授賞式に出ていただけないのは、やむを得ないこととはいえ、残念です。この点は、これから改善していきたい課題であると考えております。